

## 4 軸丸南・軸丸北地域の景観

### ①軸丸南・軸丸北地域の概要

軸丸地域は、軸丸南自治区・軸丸北自治区から成る。江戸時代には、岡藩のうち緒方郷軸丸組軸丸村であったが、明治22年(1889)に緒方村大字軸丸となり、軸丸南区・軸丸北区に分離された。この二つの行政区は、現在まで引き継がれている。

軸丸棚田地域は、平成11年(1999)7月に、農林水産省により「日本棚田百選 軸丸の棚田」に認定された(写真22)。理由は、「地域民が一体となって国土保全に寄与し、景観にもすぐれている」ということである。

軸丸南・北の両自治区を分ける明確な土地境界は定まっていない。井路普請・道路普請などの農業に関わる共同作業は、両自治区の取り決めで路線を定めて行っている。棚田地域として富士緒井路によって灌漑されており、両自治区を区別して記述するのは困難なので、以下にまとめて記述する。



写真22 軸丸棚田3D写真(国土地理院より)

### 1 自治区の成立(※1~2は『緒方町誌 区誌編』を参考にした)

江戸期	岡藩領軸丸組軸丸村。
明治22年(1889)	町村制実施により、緒方村大字軸丸となる。 (行政区は、軸丸南区・軸丸北区に分かれ、現在に至る)
昭和25年(1950)	町制施行により、緒方町大字軸丸となる。
平成17年(2005)	町村合併により、豊後大野市緒方町軸丸となる。

### 2 主な出来事

平安末期	釈迦堂に木造の阿弥陀如来像・不動明王像が寄進される。
天正年間	豊薩戦争で柏野城(軸丸南地域)が島津軍に占領される。
天正年間	豊薩戦争で高尾城(軸丸北地域)が島津軍に占領される。
天保8年(1837)	富士緒井路開鑿の祖・後藤鹿太郎誕生。
安政5年(1858)	年貢米が蒸れ、岡藩から取り替えを命じられる。
万延元年(1860)	農民54人が岡藩に銀札拝借願いを企図し、取り調べを受ける。

慶応 3 年(1867)	旱天により、水稻がほとんど枯死する。
明治 2 年(1869)	一揆で軸丸組大庄屋宅が打ち壊しに遭う。
明治 7 年(1874)	大野川通船のための、川浚い工事が始まる。
明治 26 年(1893)	後藤鹿太郎、富士緒井路完成をめざし調査を開始する。
明治 40 年(1907)	富士緒井路水利組合の出願。
大正 3 年(1914)	富士緒井路が末流の軸丸まで通水する。
大正 9 年(1920)	軸丸発電所（現、九州電力）が完成する。
昭和 13 年(1938)	富士緒井路白水溜池堰堤が完成。
昭和 30 年(1955)	軸丸北公民館竣工。
昭和 35 年(1960)	軸丸南公民館竣工。
昭和 51 年(1976)	昭和 50 年からの水田圃場整備完了（軸丸北地域）。
昭和 55 年(1980)	水田の圃場整備完了（軸丸南地域）。
昭和 57 年(1982)	県道猿飛橋竣工。
昭和 59 年(1984)	富士緒井路第二発電所竣工。
平成 2 年(1990)	軸丸南公民館改築工事竣工。
平成 3 年(1991)	軸丸北公民館改築工事竣工。
平成 11 年(1999)	日本棚田百選に選ばれる。

### 3 軸丸地域の構成・人口など

#### 1) 軸丸南地域

組合名	柏野、板屋、室屋、神ノ木、小林
戸数・人口	33 戸、77 人（令和元年 12 月）

#### 2) 軸丸北地域

組合名	松迫、高無礼、平治畑、五斗栗
戸数・人口	47 戸、118 人（令和元年 12 月）

### ②軸丸南・軸丸北地域の立地

写真 23 は、軸丸地域の空中写真に軸丸の範囲、河川、主要道路を示したものである。軸丸地域は豊後大野市緒方町の北端にあり、大野川本流が西から東へ蛇行し、朝地町との境界となっている。地域の南西は草深野、南には上自在、南東は下自在と境界を成している。

地域内には軸丸川が流れ、その支流は 3 本の谷地に沿って流れており、谷地では古くから水田が営まれている。富士緒井路が大正 3 年に軸丸地域の末流まで通水し、現在の棚田地形が形成された。軸丸川は、軸丸入口付近の高石垣と呼ばれる場所で、緒方上井路の下をくぐり、下自在の深町で緒方下井路に流入する。軸丸川は、緒方井路によって灌漑される緒方盆地の重要な水源となっている。この詳細については、「6 下自在地域の景観」で述べる。

軸丸川が形成した谷地に沿って、県道緒方朝地線が北方向に延びており、猿飛橋で大野川を渡河し、朝地町の国道 57 号と繋がる。別府市、大分市、由布市、竹田市など周辺地域から緒方盆地へ至る主要な道路となっている。





写真 23 軸丸地域の範囲図

### ③軸丸北・軸丸南地域を潤す井路

図 26 は、軸丸地域を潤す富士緒井路の幹線と主な支線を示したものである。赤線が暗渠、黄色線がサイフォン、青線が開渠である。富士緒井路は、軸丸の末流から上流へ約 15 km の大野川支流

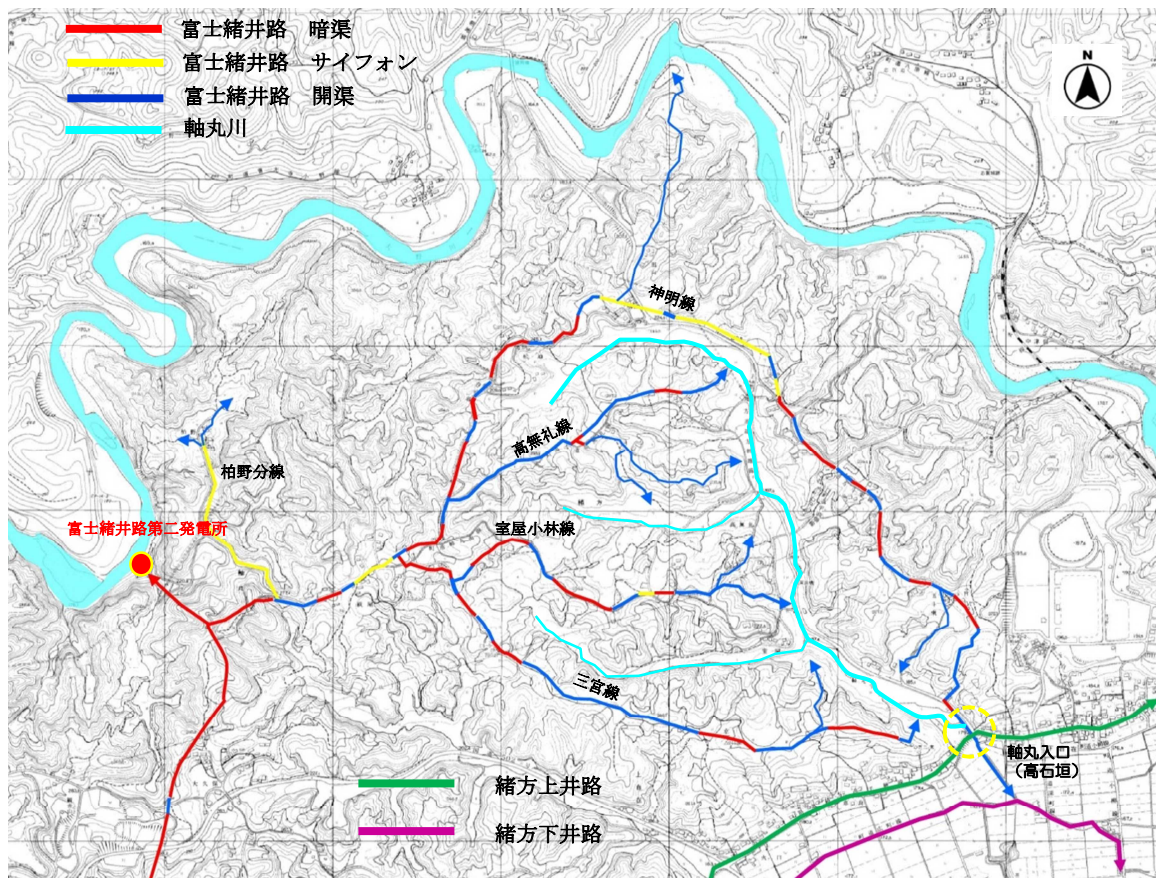


図 26 富士緒井路の路線図



大谷川に取水堰を設けて導水している。谷や山を越えるため、多数のサイフォンや隧道、水路橋が建築されている。主要幹線の約7割が隧道である。中山間地に棚田を拓くため、多大な労力が注ぎ込まれている。

大谷川から軸丸まで導水された水は、棚田や谷地の水田を潤した後、軸丸川に流れ込み最後は緒方下井路に流入する。緒方下井路の水は、緒方盆地内の下自在・馬場の一部と井上・野尻地域を潤し、緒方川を経て大野川本流に戻るのである。

緒方盆地の井路の大きな特徴は、上流域にある井路の末流水が下流域の井路に取り込まれ、広大な圃場を潤すために水を無駄にしていないところにある。上流域にある井路は、下流域にある井路の補水の役割を担っているということである。

#### ④軸丸北・軸丸南地域の土地利用の変遷

軸丸地域は、江戸時代には水利に乏しく、軸丸川沿いや谷間の湧水地を水源とした場所で稲作が行われたといわれる。その後、大正3年(1914)に富士緒井路が軸丸地域の末流まで通水し、それまでは畑地であった高所に水を巡らせることが可能となり、多くの畑地が水田化され、現在の棚田景観が形成されたという。

このことを確認するために、明治20年代に作成された「字図」(以下、「旧字図」という)をもとに土地利用状況を把握することにした。旧字図には作成年代が記入されていないため、確実な年代はわからないが周辺地域の字図には「明治二十二年調製」と書かれているものが多数ある。軸丸棚田地域も同時期に作図されたものとしておく。

旧字図には、地番と地目が記載されているため、字図作成当時の土地利用の状況がわかる。旧字図をスキャニング・接合し軸丸地域全体の土地利用の状況を把握することにした(図27)。

旧字図の接合図に地目ごとに色分けを行うことを試みたが、セロテープの糊が変色した図面や筆境の線が明瞭でない図面があるため、地籍調査後の字接合図を使用し、地目に応じて色分けを行い、明治20年代の土地利用の状況を把握することにした。



図27 旧字図の接合(軸丸の一部)



「富士緒井路通水（大正3年）により、畑地が棚田に変わった」ということを示すための史料として、「地租名寄帳 大分縣緒方村役場」（以下、「名寄帳」という）を使用した（写真24）。「名寄帳」の表紙に「緒方村役場」とあることから、昭和25年まで続いた「緒方村」時代に編集されたものであろう。記載されている土地異動情報には、昭和30年代の異動情報が頻繁に出てくるので、昭和30年の町村合併以後も使用された台帳であることがわかる。そのため、「昭和30年当時の土地情報を示す史料」と判断し利用した。

当時の土地利用の状況は、旧緒方町が平成12年に撮影した空中写真と「平成12年度中山間地直接支払制度交付金事業」で作成された土地一覧をもとに、農地（田・畑）・山林・原野の確認を行った。そして現在（令和2年）の土地利用状況は、平成12年の空中写真を現地に持参し、一筆ごとに農地や農地であった場所（原野化、山林化）の確認を行った。

以上の作業により、「明治20年代」「昭和30年代」「平成12年」「令和2年」の4期の土地利用状況を把握することができた。

作業は、まず、「旧字図」に記載された地番・地目を確認し、現在の地籍図に地目ごとに塗り分けを行い、「明治20年代の土地利用図」を作成した。現在の地籍図に明治20年代の土地利用状況を復元することには困難が予想されたが、分筆・合筆の状況や筆形状を勘案しながら復元を行うことができた。地籍図に着色した地目は、宅地・田・畑である。

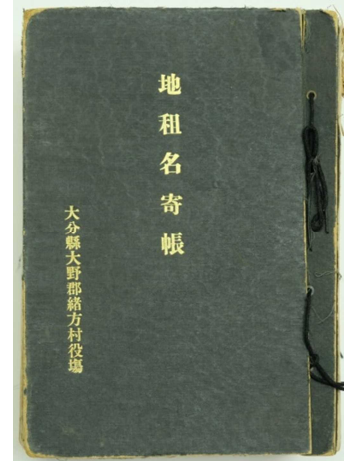


写真24 地租名寄帳

次に、「地租名寄帳」に記載された農地（田・畑）と宅地をリスト化し、これと「明治20年代の土地利用図」の対照を行った。その結果、明治20年代は山林や原野、畑であったものが、その後の開発により水田化した筆を把握することができ、「昭和30年代の土地利用図」を作成することができた。

次に、平成12年度時点の農地状況を「昭和30年代の土地利用図」に反映させ、「平成12年度の土地利用図」を作成した。さらに、令和2年度に現地踏査し調べた農地状況を「平成12年度の土地利用図」に反映させ、「令和2年度の土地利用図」を作成することができた。土地利用図作成に伴い、年代ごとの地目数も把握した（表6 年代ごとの地目数）。なお、「地租名寄帳」から抽出した「田・畑・原野・山林・宅地・農道等」の全筆数は、1,925筆で総面積は131haである。

地目	年代			
	明治20	昭和30	平成12	令和02
田	465	1,355	788	477
減反	0	0	71	175
畑	1,138	430	103	92
原野	139	2	293	475
山林	52	0	386	418
宅地	125	138	149	151
道路等	6	0	135	137
合計	1,925	1,925	1,925	1,925

表6 年代ごとの地目数（筆数）

### ⑤年代ごとの土地利用の状況

明治20年代の土地利用状況は、図28のとおりである。江戸時代から続く土地利用形態を維持しているものと推定される。水田（緑）は、軸丸川沿いの低地と、谷水が湧く窪地に分布する。畑（黄）は、水利に乏しい高地に広く分布している。宅地は、耕作地を活かすために、農地に不向きな高地や傾斜地に営まれている。軸丸南地域では柏野・板屋・室屋・神ノ木・小林集落が、軸丸北地域では松迫・田向・高無礼・代・倉園・平治畑・五斗栗集落が形成されている。

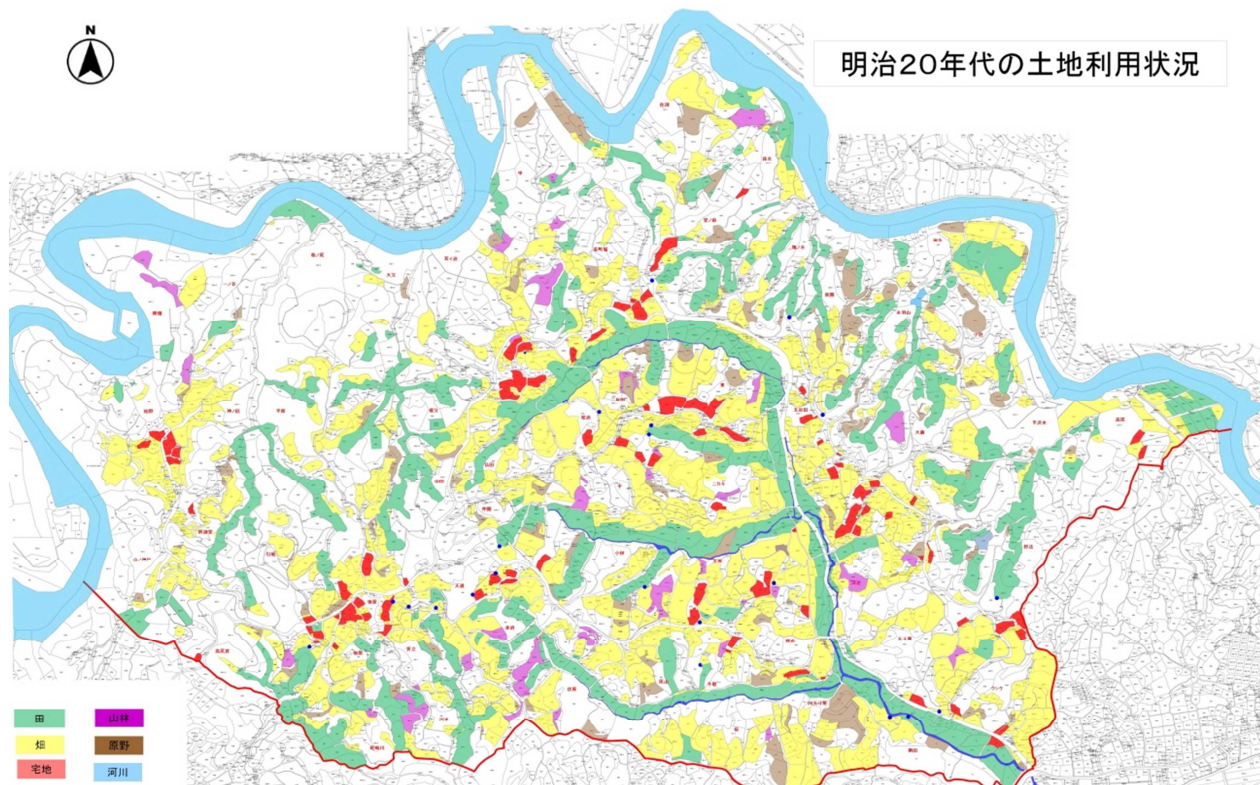


図 28 明治 20 年代の土地利用状況

土地利用図の中で、山林（紫）・原野（茶）は、後に農地化する場所である。「地租名寄帳」の記載に基づいて着色を行った。「軸丸地域は、軸丸川沿いや谷間の湧水地付近で稲作を行っていた」といわれているが、図 28 は、まさにその状況を示している。

図 29 は、表 6 のうち明治 20 年代の地目割合を円グラフで表したものである。田が 24.2%、畑が 59.1% を占め、明治 20 年代になっても畑作に依存していた集落であることがわかる。

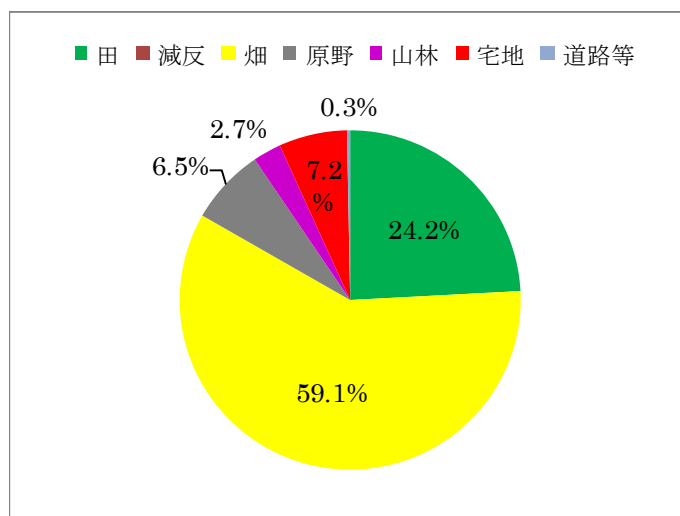


図 29 明治 20 年代の土地利用割合

図 30 は、昭和 30 年代の土地利用状況を示したものである。大正 3 年に富士緒井路が通

水してから 42 年後の状況である。図には、富士緒井路の幹線と主な支線を書き加えた（青の破線）。

昭和 30 年代は、稲作が機械化されておらず、牛による田起こし・代掻きが行われていた時代で、畦畔も人力による畦塗りが行われていた。明治 20 年代に比べて水田の筆数が 3 倍近くも増加していることに驚かされる。図 28 と図 30 を見比べると、畑（黄）が水田（緑）化していった状況が一目瞭然である。この転換の大きな要因は、富士緒井路の通水により、高地に灌漑用水が運ばれるようになったことである。富士緒井路は尾根筋に開鑿され、低地にはサイフォンを敷設し（写真 25）、山には隧道を穿ち、通水を行った。そのため、明治 20 年代に 24.2% だった水田は 70.4% に拡大し、畑は 59.1% から 22.3% へ減少している（図 31）。軸丸地域の棚田景観は、富士緒井路の通水により形成されたことを物語るものである。





昭和30年代の土地利用状況

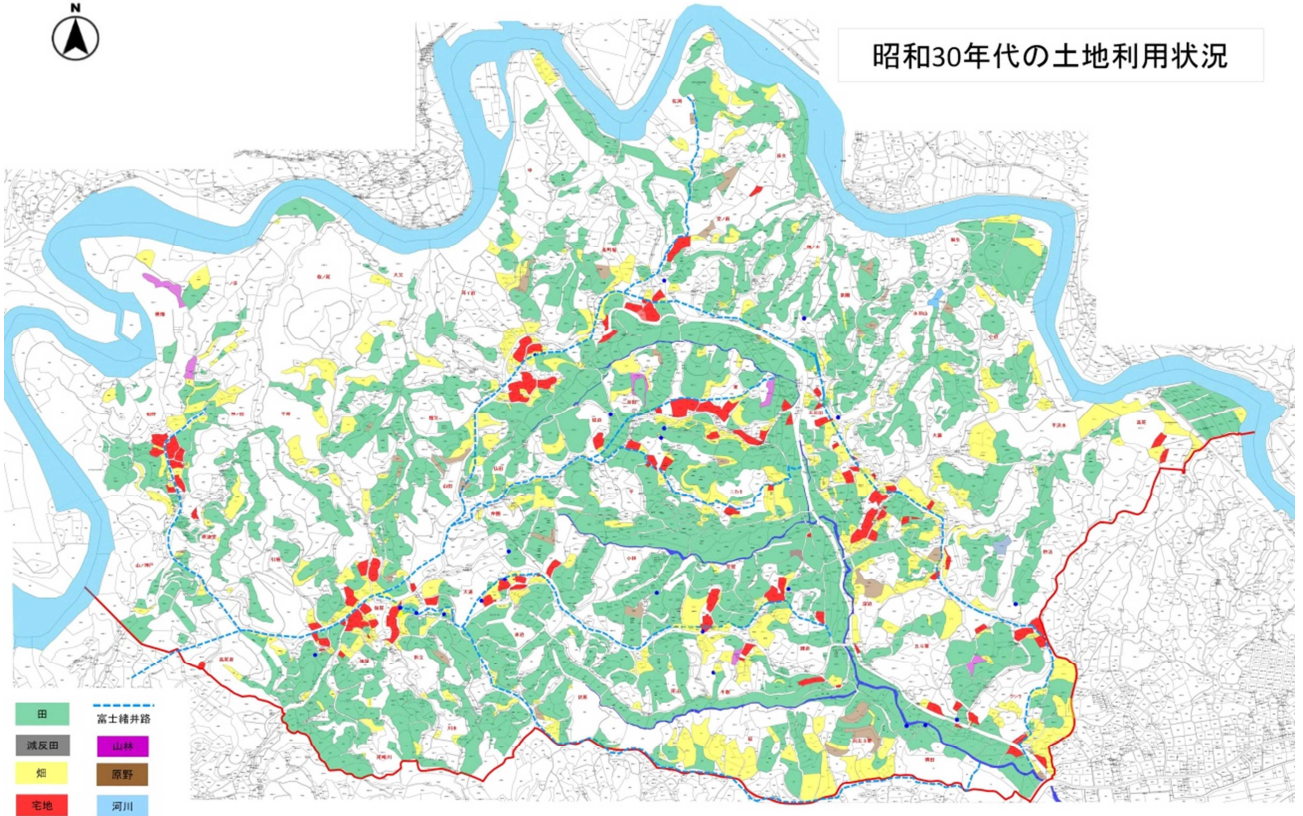


図 30 昭和 30 年代の土地利用状況



写真 25 富士緒井路のサイフォン敷設

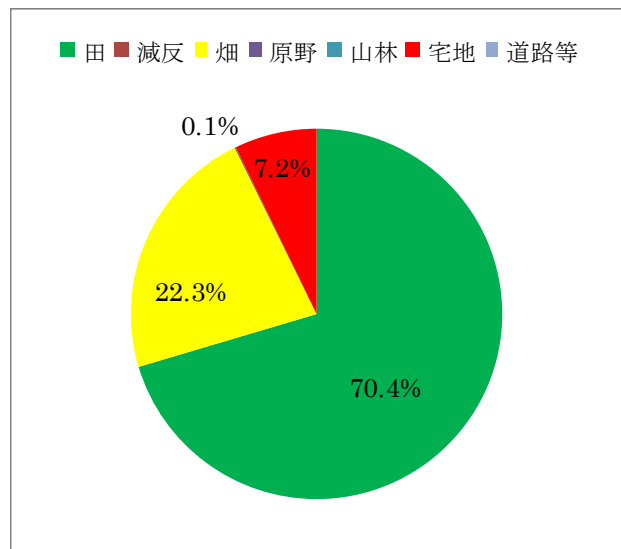


図 31 昭和 30 年代の土地利用割合

図 32 は平成 12 年(2000)の土地利用状況である。この年には、中山間地等直接支払制度が始まった。荒廃する中山間地耕作者に直接交付金を支払うことにより、農地の保存と地域社会の維持をめざしたものであった。図 32 を見ると、約 45 年の間に田畑が山林化(紫)・原野化(茶)し、農村が荒廃していく状況がよく示されている。

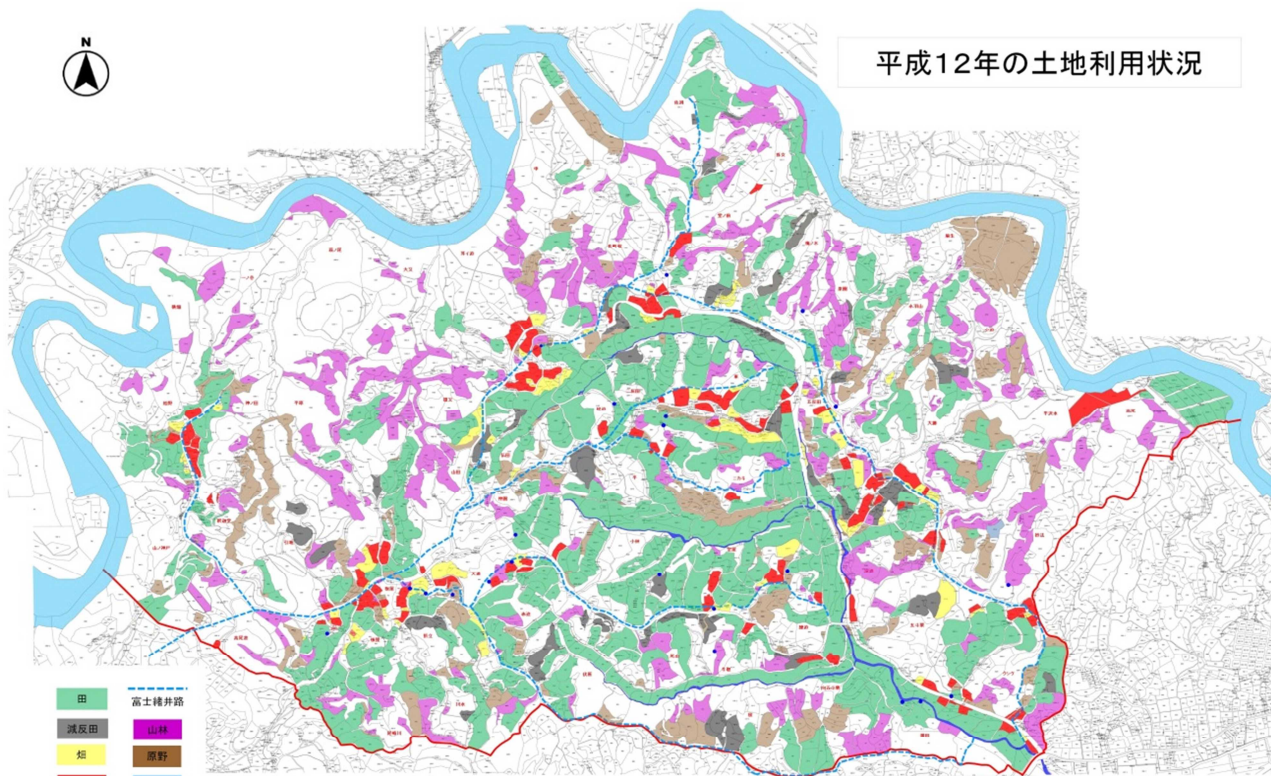


図 32 平成 12 年の土地利用状況

図 33 は、平成 12 年の土地利用割合の円グラフである。昭和 30 年代には 70.4% を占めていた水田が 44.6% (減反を含む) にまで減り、水田が原野や山林と化している。原野と山林の割合が、合わせて 35.3% に達している。道路等が 7% になった理由は、軸丸集落内を通る県道・町道の拡幅工事が行われたため、農地が公衆用道路化したためである。

宅地は明治 20 年代からほとんど増えておらず、7% 台を維持している。戸数は徐々に減っているが、自宅周辺に農業機械倉庫などを建てる家庭が増えたため、宅地数が増加している。

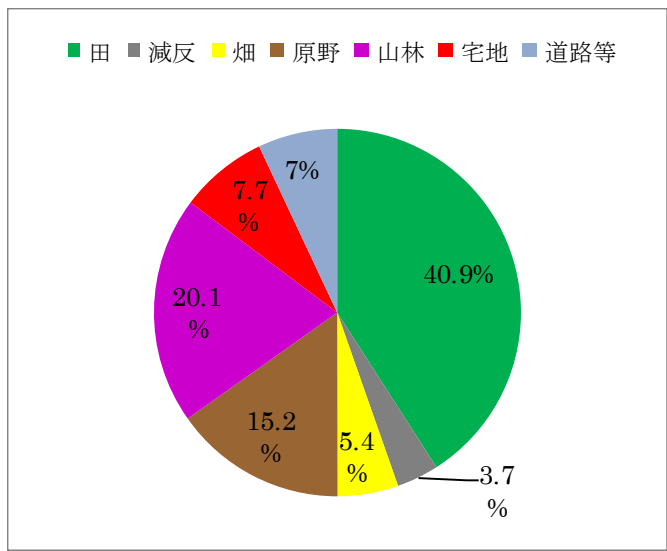


図 33 平成 12 年の土地利用割合

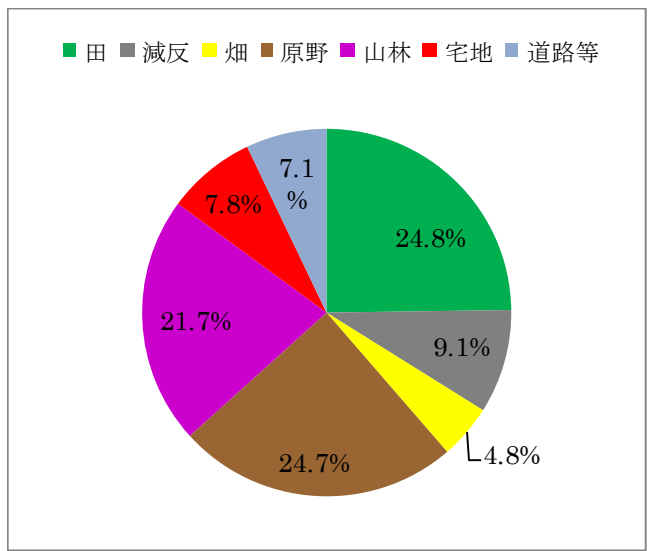


図 34 令和 2 年の土地利用割合



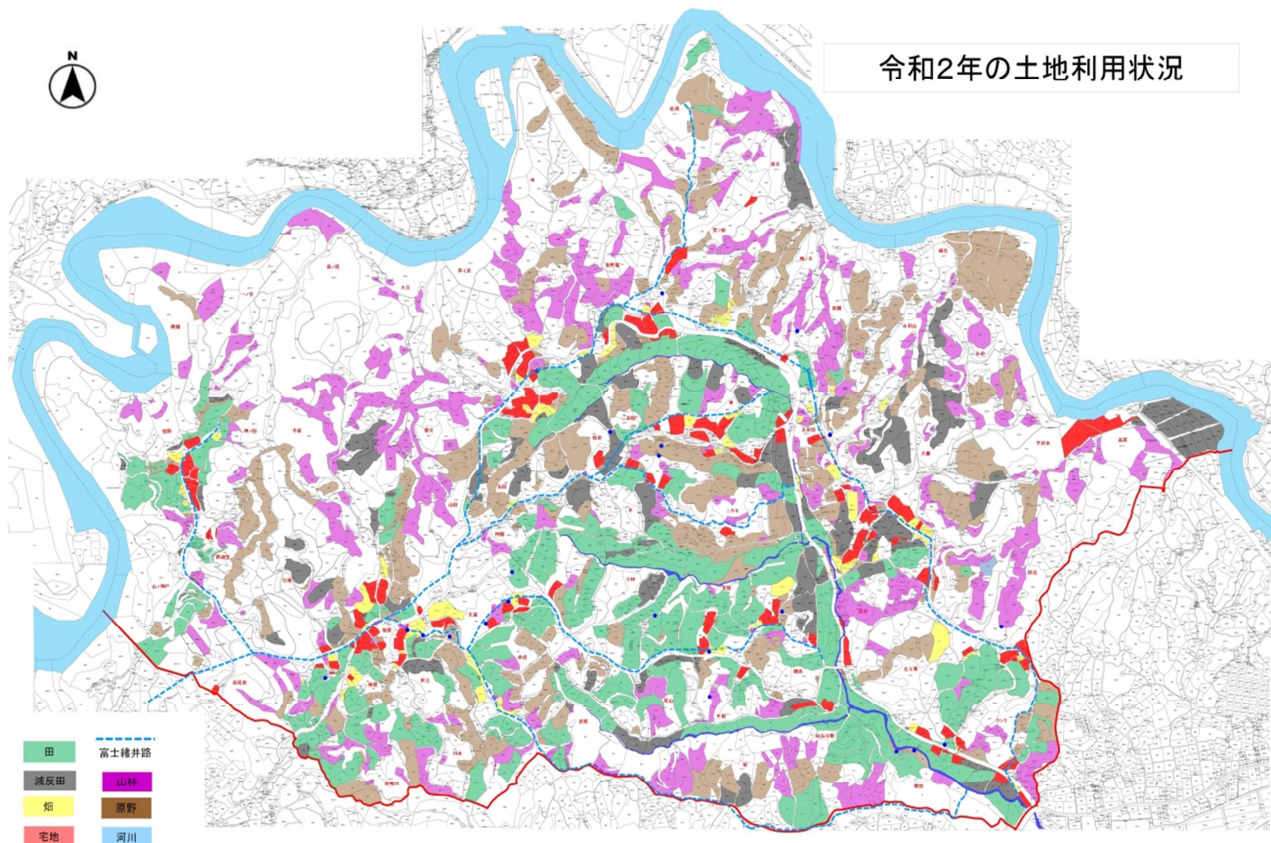


図 35 令和 2 年の土地利用状況

図 33 と図 34 を比較してみると、平成 12 年に 40.9%であった水田は、20 年間で 24.8%にまで減少し、代わりに 3.7%であった減反が 9.1%に増えている。15.2%であった原野は 24.7%まで増加している。山林化は 20.1%から 21.7%と横ばいであるが、今後原野が山林化していくため、山林面積は更に増加することは確実である。山林・原野の合計は、平成 12 年には 35.3%であったが、令和 2 年には 46.4%にまで増えている。

そして、図 35 は令和 2 年の土地利用状況である。これを見ると、富士緒井路の通水により畑から水田化された土地が、再び畑に戻るどころか原野と化しており、いずれは山林化してしまうという危機的な状況を示している。

図 36 は年代ごとの筆数の折れ線グラフである。昭和 30 年代に最盛期を迎えた稲作が、高度経済成長による農業後継者の減少と昭和 50 年代に始まった減反政策の影響をもろに受け、農村が疲弊していく様子を如実に描き出している。

## ⑥軸丸の棚田景観の今後

軸丸地域で、富士緒井路通水後に見事な棚田景観が形成されたことは間違いない。しかしながら、年代ごとの土地利用状況の調査は、急激に棚田が荒れていく農村の惨状を明らかにするものとなった。軸丸南・北地域で、30 歳代の農業後継者がいるのは、僅か 2 世帯である。軸丸地域で今後も水田が営まれていく場所は、明治時代と同じ軸丸川周辺と寄り付きの良い圃場に限定されていく可能性が極めて高い。はるか 15 km 上流から導水する長大な井路を建設し、電力を売電し、水利費の農家負担を軽減するという壮大な取組を行う富士緒井路土地改良区の存在と棚田景観の価値はゆるぎないものである。重要文化的景観の選定については、このような状況を十分勘案し、保存活用計画を策定しなければならない。

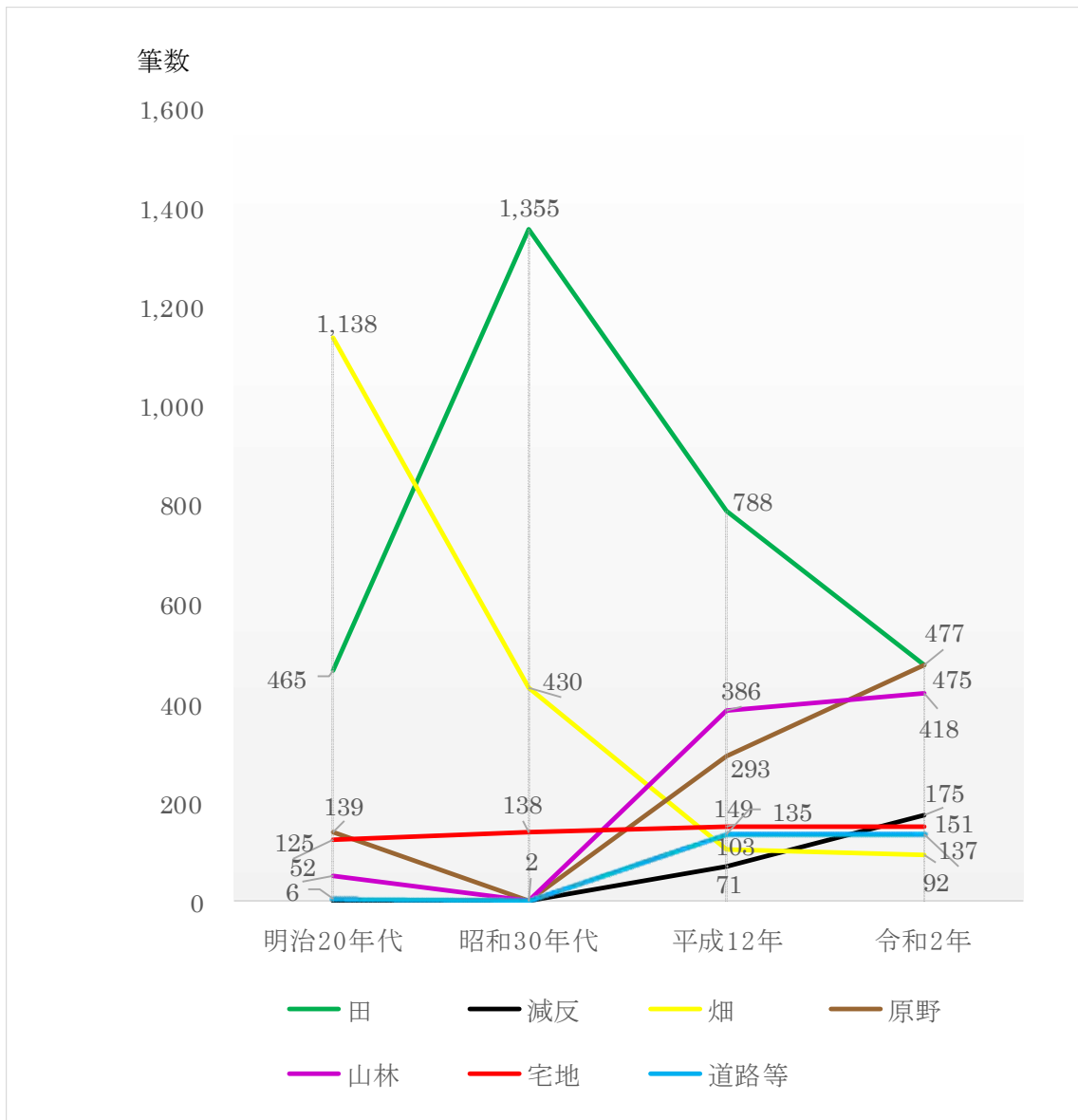


図 36 年代ごとの筆数の変化

### ⑦軸丸棚田の古田と新田

軸丸地域では、富士緒井路開鑿前から水田化していた場所を「古田」とよび、富士緒井路開鑿後に水田化した場所を「新田」と呼ぶ。古田は、主に軸丸川とその支流沿いに分布している。富士緒井路の水は、棚田を経由し軸丸川に流れ込むため、近年では軸丸川の自然湧水のみを利用するという意識はあまりないようで、古田・新田を区別しなくなりつつある。写真 26 は、富



写真 26 富士緒井路により灌漑される新田



土緒井路の水（赤線）が新田（棚田）を經由し軸丸川（青線）に流れ込む状況を示したものである。写真 27 は主に軸丸川支流の水で灌漑される古田（松迫地域）であるが、谷地の左右に富士緒井路の高無礼線と神明線により灌漑される棚田がある。富士緒井路の水は棚田を灌漑した後に、谷地の軸丸川や水田に流入し、補水となっている。このような状況なので、古田・新田の区別はあまりしなくなりつつある。なお、谷地左側の傾斜面にある高無礼線により灌漑されていた新田は荒廃が進んでいる。原因は、所有者の高齢化や死亡により後継者がいなくなったことである。耕作条件の良い棚田や古田以外は、今後更に耕作放棄が進む可能性が高い。

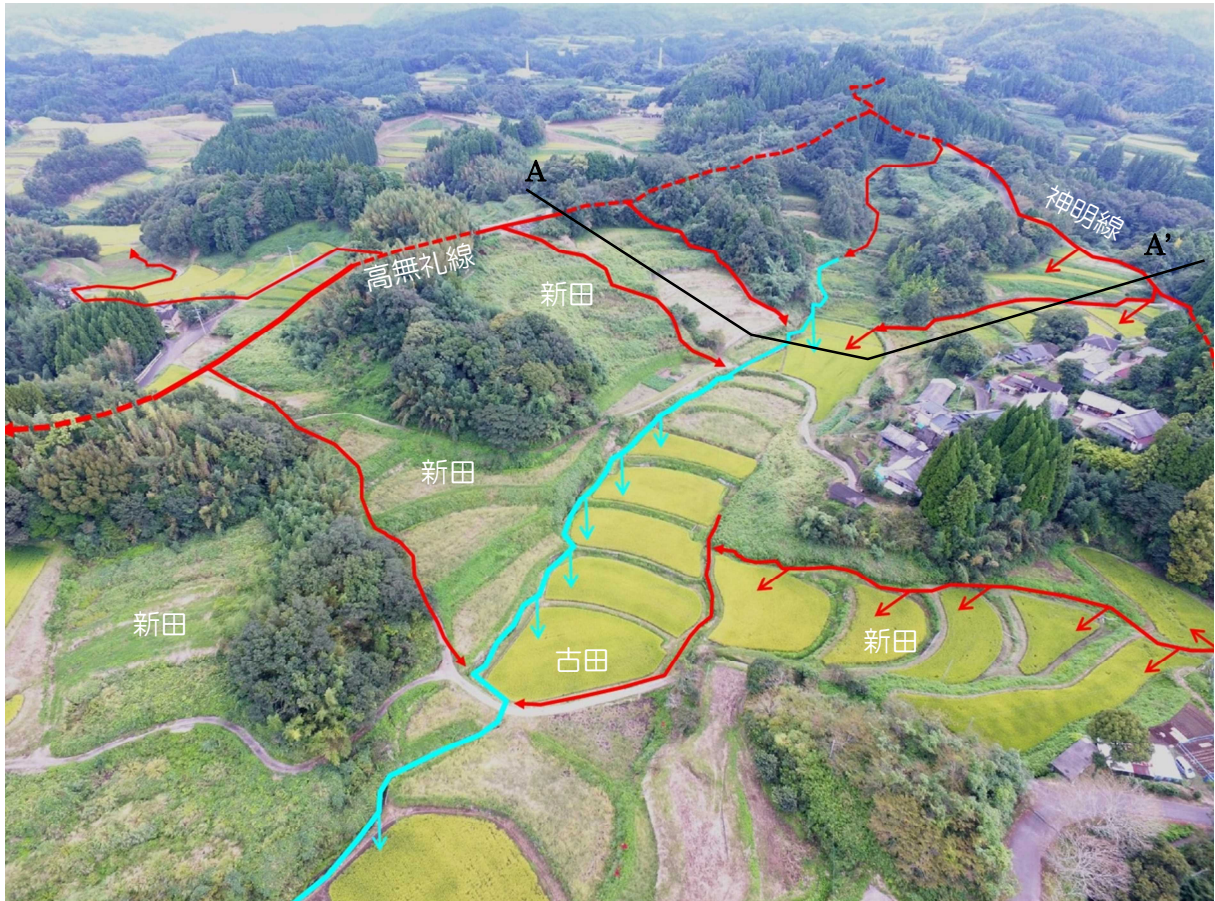


写真 27 富士緒井路により灌漑される新田と古田

#### ⑧軸丸地域のクンバ（汲ん場）

富士緒井路により灌漑される軸丸南・北地域では、わずかに3ヶ所のクンバ（汲ん場）が確認できた。井路線に沿って民家が立ち並ぶような形態ではないので、汲ん場が少ない。



写真 28 神明線にある汲ん場



写真 29 室屋小林線にある汲ん場



### ⑨軸丸地域の棚田（古田・新田）の断面模式図

図 37 は、富士緒井路によって灌漑される軸丸棚田（新田・古田）の断面模式図である（写真 27 A-A' 間）。大正 3 年に富士緒井路が末流まで通水し、尾根筋の高い場所を神明線・高無礼線が流れ棚田を潤し、軸丸川に流れ込むようになった。軸丸川の湧水で今でも古田が潤されているが、富士緒井路の水が軸丸川に補水されており、古田は「補水田」という扱いになっている。

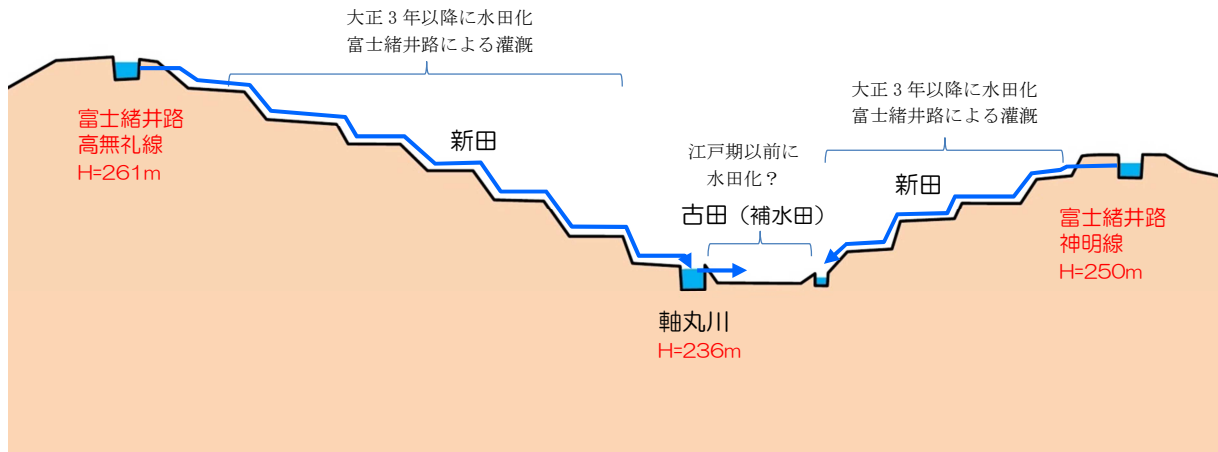


図 37 軸丸棚田（新田・古田）の断面模式図（写真 27 A-A' 間）

### ⑩軸丸地域の景観の構成要素

軸丸地域は、大正 3 年の富士緒井路の通水によって畑地が棚田化した。昭和 59 年(1984)には富士緒井路第二発電所が竣工し、井路の水を利用した発電を行い九州電力株式会社に売電をするようになった。その利益のおかげで水利費も安くなり、農家の負担も軽減し、県下でも優良な水利組合として名を馳せている。平成 11 年には日本棚田百選に選ばれるほどの中山間地である。しかしながら、近年は高齢化と後継者不足により地域内の棚田に荒廃地が目立つようになっている。

昭和 50 年代に、南北地域とも圃場整備が完了したため、従来の棚田景観は失われたが、軸丸南地域の柏野・室屋・桜の棚田、軸丸北地域の松迫～二反田～東の棚田景観は従来の面影を残している。大正年間に苦難を乗り越え通水した富士緒井路に関する施設や棚田の景観は特筆すべきものがある。

軸丸の棚田景観を作り上げた富士緒井路の路線は、暗渠（隧道）・サイフォン・開渠・水路橋から成るが、ほとんどの場所で改修工事が施されており、当時の面影を残す場所は少なくなっている。富士緒井路に関しては、近現代的な改修や施設などであるが、棚田などを含め、以下に構成要素として代表的な物・場所を示しておく。

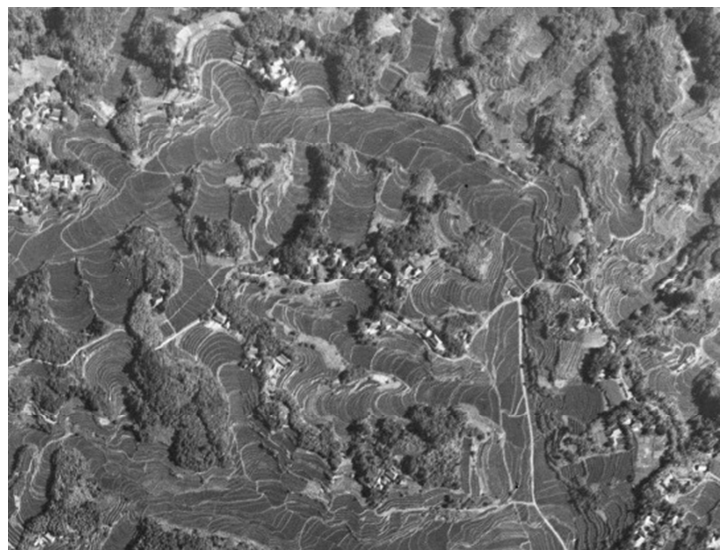


写真 30 軸丸地域の棚田  
(昭和 23 年米軍撮影 国土地理院所蔵)



表7 軸丸地域の景観の構成要素（軸丸南地域）

番号	要素名	写真	説明
1	富士緒井路第二発電所	 	<p>富士緒井路は長年の井路改修工事などで、賦課金が反当 18,000 円と高額になり、運営が厳しくなった。その打開策として第2発電所建設を計画し、昭和 59 年に竣工した。最大 1500kw の電力を生み出し、売電により利益を上げ賦課金の軽減と健全財政の確立を行っている。</p>
2	富士緒井路第二発電所高尾倉放水所		<p>非灌漑期に高尾倉放水口から大野川へ毎秒 2.0 m<sup>3</sup>の水が放出され全くの無駄となっていたが、第2発電所を建設することにより、売電の利益を得て組合員の負担を軽減し農業所得の向上を図ることができるようになった。矢印右が発電所への放水口で、左が神明線への幹線水路。</p>
3	熊野社		<p>棟札に文永 7 年（1270）の記録があるという（『緒方町誌区誌編』）。境内内に釈迦堂があり平安後期と推定される如来像が安置されていたので、創建もその当時と推定される。秋分の日に開催される緒方五千石祭に神輿が御幸する。</p>
4	釈迦堂		<p>熊野社境内にある釈迦堂で、平安後期の如来坐像・不動明王坐像が安置されていた。いずれも大分県指定の有形文化財。現在は、豊後大野市歴史民俗資料館に保管されている。梁には安政 2 年に勢州安濃からの参拝者の墨書が残されている。</p>
5	後藤鹿太郎碑	 	<p>後藤鹿太郎碑は、富士緒井路開鑿の祖・後藤鹿太郎を讃えるため熊野社境内の岩壁に刻まれたもので、富士緒井路開鑿の由来の説明板がはめ込まれている。昭和 12 年に後藤円次郎が撰文したもの。</p>

番号	要素名	写真	説明
6	柏野の棚田		柏野の棚田は圃場整備が行われているが、それでも弧状の畝が美しい。
7	室屋の棚田		軸丸南地域で唯一残る圃場整備が行われていない棚田。弧状の畝が美しい。
			田植直後の棚田。
8	桜の棚田		軸丸南の室屋集落と県道緒方朝地線が見える。古田・新田と集落の眺めが見事で、遠方の城山（朝地町）まで見通せる。

表8 軸丸地域の景観の構成要素（軸丸北地域）


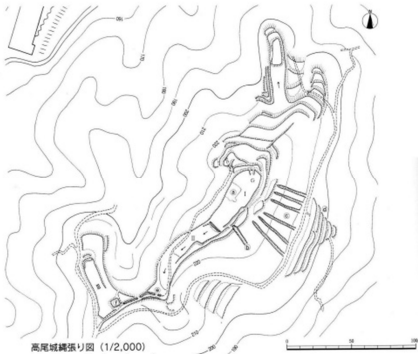
番号	要素名	写真	説明
9	大日堂	 	松迫組合が維持管理する大日堂で、牛馬の仏として信仰されている。現在は畜産を行う者はいないが、地域の守り神として篤く崇敬されている。



番号	要素名	写真	説明
10	愛宕将軍地蔵堂		<p>松迫・高無礼組合が維持管理する地蔵堂で、8月23日頃に清掃と祭祀が行われる。以前は23日にお籠り、24日に祭祀が行われていた。地域の年中行事が廃れていくなかで貴重な風習である。</p>
11	高無礼線・代線の隧道内分岐点		<p>高無礼線と代線の分岐点が隧道内にある。軸丸地域内には隧道内で分岐する地点がいくつかあるが、この場所は市道脇に穿たれており観察が容易にできる。ただし、凝灰岩土壌がやわらかいため隧道内の風化が進行しており、補強工事が行われる可能性がある。</p>
12	松迫から東にかけての古田・新田の景観		<p>字松迫から字東方向を見た空中写真。新田の棚田の耕作放棄地が増えているが、この古田の景観は現在のところ維持管理が行き届いている。県道緒方朝地線に沿って棚田の眺望が開けている。</p> <p>写真は、字東から字松迫方向をみたもので、右端に県道が写っている。付近に軸丸北区運営のライスセンターもある。</p> <p>字東の古田と中央あたりに新田が写っている。彼方に写っているのは、標高1,605mの傾山。県道緒方朝地線から写したもので、田植時期から稲刈り後まで四季の移ろいを観察できる。軸丸北ライスセンターのすぐ側から見ることができる。</p>

番号	要素名	写真	説明
13	オリトのサイフォン		<p>オリトのサイフォンは大正年間に埋設したサイフォン管が老朽化したため、平成18年に新たに新管の敷設が行われた。軸丸地域にはいくつかのサイフォン施設があるが、オリトのサイフォンは、管の落口と出口が見通せて、サイフォン構造の理解がしやすい場所である。</p>
			<p>サイフォン管の出口は容易に観察することができ、小学校児童の富士緒井路学習では絶好の見学場所である。</p>
14	軸丸社		<p>祭神は天照大神・菅原神で明治10年に17の小社を合祀した。慶応2年の鳥居や嘉永2年の石灯籠がある。朝地町板井迫から慶応4年に伝わった獅子舞が、軸丸獅子舞として祭の際に奉納される。例年9月の秋分の日に開催される五千石祭に、神輿が御幸する。</p>
15	五斗栗の棚田		<p>五斗栗組合の前面に広がる棚田で、圃場整備がなされているが弧状の畦畔が美しい。付近には軸丸社や富士緒井路神明線の隧道もある。</p>
16-1	神明線の隧道		<p>富士緒井路の路線は隧道が非常に多い。軸丸地域の各所に隧道が掘られている。神明線では素掘りの隧道が残されており、井路開鑿時代の様子を見ることができる。写真は神明社からクシケの水田へ繋がる隧道で、コンクリートの補強などがなされておらず、素掘りの状況がよくわかる。</p>



番号	要素名	写真	説明
16-2	神明線の隧道		<p>軸丸社南側を通過する神明線の隧道。維持管理用の覗き穴が穿たれ、光が差し込んでいる。クンバ（汲ん場）としての機能も有していた。</p>
17	高尾城		<p>天正14年の島津軍侵入に際して築城されたといわれ、堀中務、阿南但馬など緒方武士約200名が籠ったという。島津軍の猛攻を受け陥落した。戦国時代末期の山城で、緒方町域では最も遺構がよく残る。堅堀や畝状空堀群が明瞭である。 左図は『緒方町誌』より引用。</p>

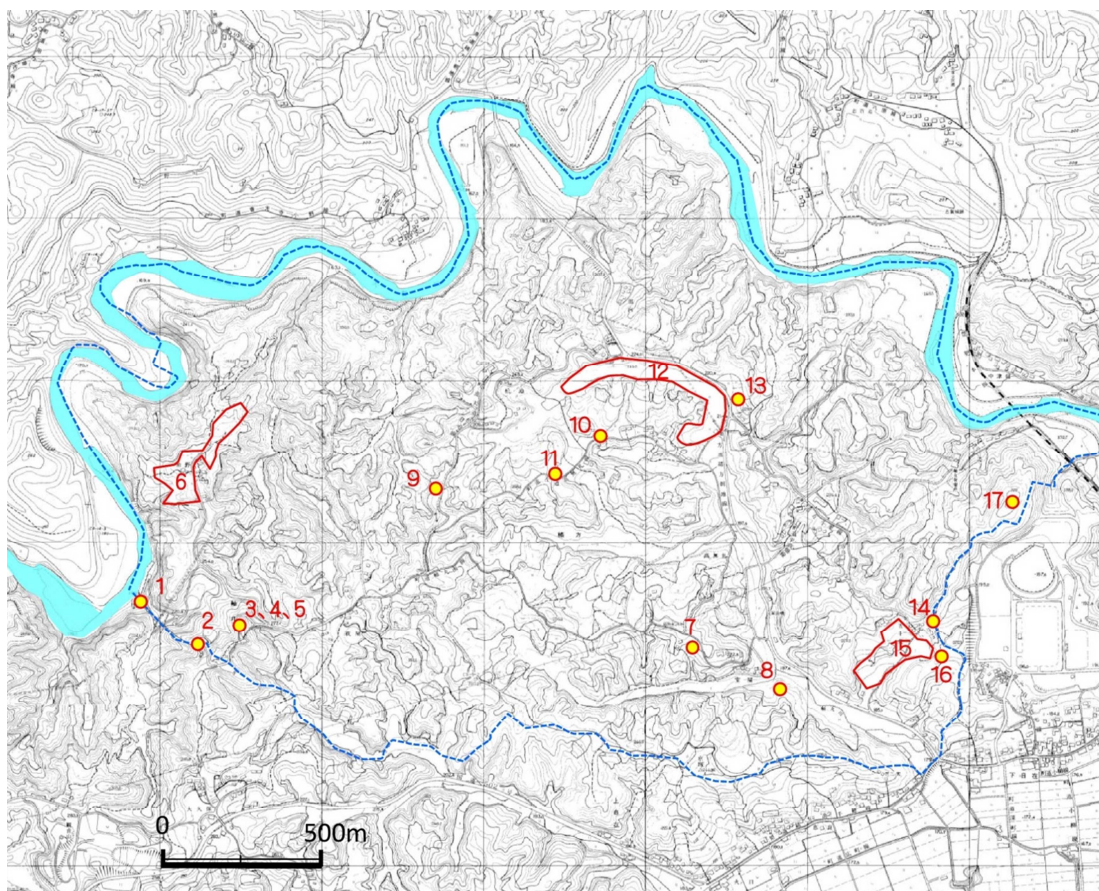


図 38 軸丸地域の構成要素の位置図